

人権なら

2024年3月1日

第159号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

3・11の教訓を忘れるな!

大震災から13年。被災者の苦しみは今も続く

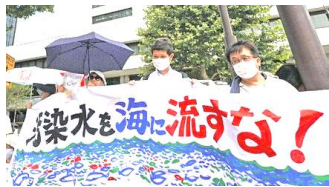
あの3・11から13年経つ。2万人もの尊い犠牲者を出した未曾有の東日本大震災と、それに起因した福島第一原発大事故は世界中を震撼させた。

原発事故では、今も3万人を超える避難者がいる。賠償請求訴訟を闘う多くの人たちもいる。家族も家屋も土地も故郷も失い、被災者の苦しみは続いている。

だが、政府・電力会社はもちろん、大半の人々が3・11を忘れ去っている。原子力マフィアは事故の教訓を無視し、原発回帰に突進。現在、40年超の老朽原発を含め、12基を再稼働させている。

原発は危険極まりないことを示した能登地震

年明け早々、能登半島で震度7の大地震が起きた。被害は甚大で、誰もが震災の恐ろしさを改めて痛感した。半島にある志賀原発は敷地内を断層が走る。冷却電源が停止し、変圧器が爆発。油漏れ、汚染水漏れ、放射線量チェック不備も起きた。幸い、稼働停止中で難を免れた。反対運動で頓挫した珠洲原発が実現していたら、第二の福島になっていた。



除去できないトリチウムの汚染水を海洋放出

能登被災地救援への政府の初動対応は遅かった。被害の規模を小さく見せたかったのだ。志賀原発も「異常なし」と虚偽発表。福井の原発銀座や再稼働目の柏崎刈羽原発への不安増大を恐れたのだ。

震度7クラスの巨大地震が何度も襲う地震大国、日本。なのに、政府は危険極まりない原発を絶対に手放

そうとしない。核兵器を保有したいがためだ。

東京電力は昨年、汚染水を海洋放出した。漁業関係者の同意なしには流さないとの約束も反故に。原子力の専門家、小出裕章さんは1月の沖縄講演で「放射能汚染水を海洋放出してはならない」と訴えた。放射性物質トリチウムはどんな水処理を使っても取り除けないのだという。



原発は即、停止させ、廃炉にすることが重要

小出さんは「原発は膨大な放射能を生み、それを抱えながら運転する機械」「人間には放射能を消す力はない。無毒化できない」と言う。それなのに、国はマスコミを使って誤情報を「大本営発表」させ、原発推進へと誘導する。再稼働賛成は今や過半数に達する。

地震は予知できない。事故は必ず起きる。政府、電力会社は被災者の生活を奪っても、責任を負わない。原発は即、停止させ、廃炉にしないといけない。

確定申告相談会を実施

インボイス導入で事業者泣かせの相談が大半年

2023年分確定申告相談会は2月7日から22日まで県内9か所で開催した

＝写真。大勢の会員が訪れ、相談を受けた。中小企業者協会の会員を



対象にした相談会も2月27日から開始。3月8日まで続く。今回の相談の特徴は、インボイス制度の導入で消費税分の計算が煩わしく、会員泣かせとなっていること。にもかかわらず、裏金議員の脱税行為が許されている現状に怒りの声が多く聞かれた。

たのしいはおいしいにつながる

1月の子ども居場所づくりは「わいわい食堂」

1月の子ども居場所づくりは26日に三宅町あざさ苑で「わいわい食堂」

をしました＝写真。

この日のメニューはハヤシライス、マカロニサラダと手づくりフ



ルーツゼリー。参加者は幼児1、小学生24、中学生9、高校生6、サポーターの大人13の計53人でした。

食堂をすることで、子どもたちが友だちを誘ったり、直接声をかけたり、「つながり」を広げています。

地域の人たちが協力して調理などをサポート

初めに、スケジュールやルールを貼り出し、簡単に説明します。全員がルールを守って過ごすことができます。この日も夕飯を食べて、部屋遊びをして、のんびり過ごしました。約80食を用意したハヤシライスは、あっという間になくなりました。調理はNPOやひまわりの職員さんら地域の人が協力してくれました。

和室ではサポーターとおしゃべりをしたり、ボードゲームをしたり、おしゃべりをしたり、いつでも入れるような小さな輪がいくつかできました。

いろんな子どもがほっこりできる居場所を

高校生はサポーターとおしゃべりを楽しんだり、小学生に優しく声をかけてくれたり、先輩として振る舞ってくれました。中学生の女子はルーを温めたり、盛り付け配膳など手際よく動いてくれました。低学年の子たちにもやさしく声をかけてくれました。男子は後片づけや車への荷物運びをしてくれ、頼もしく感じました。

いろんな人の理解と協力をえて、いろんな子どもが参加できる、ほっこりできる「居場所」。しんどいことがあっても、「つながれる」人がいると感じてもらえる。そんな居場所ができれば良いなあと思っています。

(子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫)

ヘイトスピーチ規制条例制定を

実現する会が丹羽雅雄・弁護士を招き学習会

奈良県ヘイトスピーチ規制条例制定を実現する会の第4回学習会が2月10日、県人権センターであった。丹羽雅雄・弁護士が講演。日本におけるヘイトスピーチ・ヘイトクライムの本質とは何か、を提起した。

その本質は、特定の属性を有する人びとを、同じ人間であることや、社会の一員であることを否定し、差別し、攻撃する点にある。歴史的・構造的背景と原因も存在する。日本は戦後も植民地支配の歴史を反省せず、在日朝鮮人や外国人を社会の一員として見ない。障害者、性的少数者、被差別部落の人々、アイヌ先住民、琉球・沖縄の人々に対するヘイトも拡大する。

歴史的・構造的な背景とヘイトの原因は何か

歴史修正主義の転換点は1997年だった。河野談話、村山談話を受け、1997年度の中学歴史教科書に「従軍慰安婦」問題が記述された。そのことを受け



て、「新しい歴史教科書をつくる会」の結成、「自虐史観」攻撃の開始、「日本会議」の結成があった。安倍、菅政権の閣僚はほとんど日本会議の会員が占めた。メディア関係では、「諸君」「正論」の保守論壇誌、嫌韓流出版本や産経新聞・読売新聞へと拡大した。

差別問題で注目すべき2つの司法判断

昨年、注目すべき司法判断が2つあった。東京高裁が示現舎による出版やネットによる部落差別事件に関して「差別されない権利」を認めた。横浜地裁川崎支部は在日女性に対するネット上のヘイトスピーチに「不当な差別的言動」と損害賠償194万円を認めた。

私たちは過去、現在、未来への責任のために加害と差別、これらに抗う人間の尊厳のための闘いの歴史に真摯に向き合い、ヘイトスピーチ、ヘイトクライムの規制を含む包括的な自治体条例を創ろうと訴えた。

綱領改正の中身と過程を検証

部落問題全国交流会で解放同盟綱領を論議

部落問題全国交流会が1月21日にあった。部落解放同盟の2011年綱領問題について論議した。毛利さんと、大槻さんが問題提起。綱領と「基本文書」について説明するとともに、綱領改正の背景にあった2006年の「一連の不祥事」問題や、その後の「提言」については一言も触れていないことを指摘した。

基本文書では「現実の差別実態に立脚した具体的な問題解決への議論こそが重要」として、「部落問題に関わる議論は、現実に存在する差別の正確な実態把握にもとづき、これを克服していく具体的な政策につながるものとして議論されねばならない」「それは学術的であったとしても単なる知的好奇心の範疇で弄ばれてはならない。差別に苦しむ人々が抱える具体的な困難や悩みを解決していく議論と直結させていくことが常に問われなければならない」と記している。

部落問題について誰も何も発言できない

毛利さんらは、このような主張では、部落問題について誰も何も発言できないことになる。基本目標からは糾弾の言葉も消えている、などと指摘した。

議論では、綱領には「部落差別が存在することによって、部落民が社会的に排除され、孤立させられていると同時に、支配秩序維持のための政治的分断機能や超過利潤追求の経済搾取機能、民衆の不安・不満をそらす安全弁としての社会的統合機能の役割を果たさせている」とある。だが、誰が誰にその役割を果たさせているのかがまったく読み取れない。解放同盟「外」を意識した記述ではないのかとの意見があった。

解放同盟の「綱領改正」は、1982年「北九州問題」をめぐる、事件の「隠蔽」と、反対派の「排除」。さらに、1987年の藤田敬一さん著「同和はこわい考」の内容を「差別思想」と決めつけるなど、1984年、1997年、2011年の3回にわたる改正を巡る過程は、人事（権力）抗争を経て行われてきたと言える。

米軍廃棄物展が全国ツアー

大阪では中村之菊さんのトークと映画上映も

「米軍廃棄物パネル展」と映画「サンマデモクラシー」上映会が1月27日、大阪市内であった＝写真。会場では、沖縄にある世界自然遺産



「やんばる」の米軍北部訓練場返還跡地で見つかった米軍廃棄物の現物や、写真パネルを数多く展示。このパネル展は現在、全国各地を巡回ツアー中だ。

中村之菊（みどり）さん（写真）がギャラリートーク。中村さんは2007年頃から昆虫の生態研究を始める。2011年の秋、沖縄北部の東村高江でリュウキュウウラボシシジミの成虫が大量発生しているのを確認する。



この時期、米軍のヘリパット建設が再開され、貴重なチョウが生息できる環境が破壊されるとの危機感を持った。周辺地域の生物分布調査なども始め、新たな知見の発見や、具体的な悪影響なども見つけて、報告したり、抗議をしてきた。

沖縄の現状を知り、自分事として考えて

2016年以降、返還された訓練場跡地での生物調査を続ける中で、米軍廃棄物（訓練用砲弾や有毒化学物質）が相次いで発見された。東村山在住の蝶類研究者、宮城秋乃さんと出会い、さらに研究を続ける。やんばるの生態系への影響を懸念し、抗議活動も続けてきた。中村さんは、沖縄のこうした現状を知ってほしい。自分ごととして考えて欲しい、と訴えた。

続いて、映画「サンマデデモクラシー」を上映。内容は米軍統治下、沖縄史に埋もれた伝説の「サンマ裁判」。裁判を支えたラップと呼ばれた弁護士・政治家、下里恵良、米軍が最も恐れた不屈の政治家、瀬戸亀次郎らの行動を辿り、統治者米国と自治権をかけて闘った人々の姿を描く。民主主義を巡る闘いのドキュメントである。山里孫存さんが監督・プロデューサー。

東京高裁は事実調べを！

狭山事件の再審を実現しようと市民の集い

第8回狭山事件の再審を実現しよう 市民のつどい in 関西が2月23日、大阪市内であった。300人超が集い、狭山勝利への決意を固めた。



野村生代・立憲府連幹事長、大石あき子・衆院議員、大椿裕子・参院議員(メッセージ)が連帯アピール。吉崎なおみ・天王寺夜中同窓会長があいさつした。

黒川みどりさんが「私たちの課題」を語る

黒川みどり・静岡大学教授は「石川一雄さんの歩みと私たちの課題」と題し講演した＝写真。石川さんからの聞き取りを著書「被差別部落に生まれて」として昨年出版。部落差別を日露戦争や米騒動にまで遡り、体制の危機には差別による民衆の分断があるとした。

石川さんが「お力添えを」と一層の支援を訴え

石川さんと早智子さんはビデオメッセージを寄せた。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

性暴力問題が昨今、大きく取り上げられるようになった。昨年はジャニーズ問題。今年も有名人を巡る報道が続く。性被害に遭った人は声を上げづらいのが実態だ。訴えても証拠を示せなどの二次被害に遭う。多くの人は泣き寝入り。そのため、日本は他国に比べ表面上の被害件数が断トツに少ない。一方、巨大な権力を相手に闘う人も。伊藤詩織さんはその一人。彼女は対応を巡っての葛藤や苦悩を著書「ブラックボックス」で綴る。これを読めば、性被害者にとって闘うことの大変さが並大抵ではないことが分かる。性被害について、もっとオープンに話せる社会にしないとイケない。

それぞれ、「お力添えを」「仮出獄から30年。あきらめない。今年こそ」と一層の支援を訴えた。61年になる狭山。第3次再審請求は2006年から続く。三者協議は57回。昨年末には家令和典・裁判長が就任した。

青木恵子・西山美香・袴田秀子さんが訴え

冤罪被害者の東住吉事件の青木恵子さん、湖東記念病院事件の西山美香さん、袴田巖さんの姉、ひで子さんの3人が「あきらめない」などとアピールした＝写真。



青木さんは自宅が全焼し長女が死亡。保険金目的の放火殺人として逮捕。無期懲役から再審無罪に。

西山さんは看護助手だった病院で患者を死亡させたとして逮捕。懲役12年で服役から再審無罪に。

袴田巖さんは5月に再審無罪が確定。ひで子さんは「苦しんでいる人がいる。石川さんも。助けねば」と。

模擬裁判で加害と被害の主張への判断を問う

模擬裁判では、学生ボランティアが電車内での痴漢行為を巡って加害者と被害者になって尋問を受けた。どちらの主張が正当かの判断は参加者に問うた。模擬裁判は伊藤睦・京都女子大学教授が演出した。

ライブでは、「カオリンズ」と「アカリトバリ」が歌を披露。昨年亡くなった布川事件の桜井昌司さん作詞・作曲の歌「ゆらゆら春」を合唱して会場を盛り上げた。



終了後、新今宮駅前までパレードした＝写真。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/